慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラツサアルとロオドベルトス
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.12 (1925. 12) ,p.1768(58)- 1790(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19251201-0058
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19251201-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラッサアルとロオドベルトス

小泉信三

ラッサアルの實際運動上の標語は國家的補助を受くる勞働者生產組合と普通平等直接選擧とであつた。彼れの公開答書に曰はく、「勞働者自身を己れの雇主とすること、是れが實に彼の冷刻なる賃銀鐵則を廢止する方法であつて、又實に其唯一の方法である」と。勞働者自身を己れの雇主とするといふことは、勞働者生產組合の組織を意味して居る。然し生產組合の組織はラッサアルの攻擊措かざるシュルツエ・デリッチユも之を主張する。然らば彼れの提案は、シュルツエのと何の點が異なるかといへば、シュルツエが自助自賴の原則を說いたのに對して、ラッサアルは國家から資本の融通を仰ぐ生產組合を提議したのである。「勞働者の自由聯合（アッソチアチヨン）、併し乍ら實に國家の手に依つて保護奬勵せらるゝ勞働者の自由聯合、これが實に勞働者を現在の荒寥たる境界から脫出せしむる唯一の方法である」。國家を動かして生產組合援助を行はしむるの方法如何。普通平等直接選擧法の實施が是である。「普通直接選擧は獨り諸君（勞働者）の政治的根本原則である許りでなく、又同時に諸君の社會的根本的原則である。一切社會的救濟の根本條件である。是れ實に勞働者の物質的境遇を改善する唯一の手段である」。

ラッサアルが勞働者協會の運動を起こした時、彼れと倫敦に於けるマルクスとの關係は旣に絕交狀態に近きものとなつてゐた。マルクスとエンゲルスとは其往復書信中に於て頻りにラッサアルを惡罵し、其運動に對しては惡意の中立ともいふべき態度を以て之を傍觀してゐたのである。（拙稿「ラッサアルとマルクス」「慶應義塾經濟學部同人編「經濟學說研究」一六五、二二三頁、拙著「社會問題研究」二四八―二六三頁參照）。マルクスとの協力に望みを絕つたラッサアルが、その實際運動を起こすに當つて最も切願已まざりしものは、ロオドベルトスの應援であつた。彼れは再三辭を懇にしてロオドベルトスに或は勞働者協會の集會に臨まんことを勸め、或は此に入會せんことを求めたのである。而かもロオドベルトスは一面ラッサアルの運動に好意を有しながら、遂に其の懇請を容れなかつた。其理由は一身上の事情に關するものゝ外にも猶ほ彼れがラッサアルの標榜

する生産組合と普通選擧とに俱に不同意であつたことに存するのである。這般の消息は既に約半世紀前 Adolf Wagner が編纂したロオドベルトス宛ラッサアル書簡集 (Briefe von Lassalle an Carl Rodbertus-Jagetzow, Berlin, 1878) に由つて窺はれ、此等書簡の文言は既に頻りに諸書に引用せられて居るが、更に最近に至つて、曩に久しく Hatzfeldt 公爵の Sommerberg 城に埋藏せられてゐたラッサアル文書からマルクス、ラッサアル往復書簡集パッツフエルト伯爵夫人、ラッサアル往復書簡集を編纂した Gustav Mayer (前掲拙著二四八—二六三頁參看) は、その Ferdinand Lassalle. Nachgelassene Briefe und Schriften の第六卷 (一九二五年) に既刊のロオドベルトス宛ラッサアル書簡と新たに發見せられたラッサアル宛ロオドベルトス書簡とを合せた二者の往復書簡集を收めて居る。左に記する所は此書簡を材料とするものである。

ロオドベルトスとラッサアルとは其相識以前既に辯護士 Anton Bloem なる共通の友人を持つてゐた。一八五九年二月ラッサアルは Bloem に始めてロオドベルトスと面會したことを報じて「予は一兩日前 Franz Duncker 宅の晩餐會に於て貴下の友人ロオドベルトスに面會し、而して同氏が非常に氣に入つたことを申上げたい」と言つて居る。此時二人は期せずして、貴下の事は共通の一友人から聽いてよく承知致して居るといふ同じ言葉を以て挨拶したので、思はず大に笑つたと書いて居る。これより先きロオドベルトスが公にした v. Kirchmann 宛て第三公開狀 (一八五一年) はラッサアルが熟讀反覆三度に及んだものである。二人は早く其初對面の日に於て經濟學を談じた。「社交上の强制がなかつたならば、吾々は一晩中經濟學のみを饒舌したことであらう」と同じくラッサアルは報じてゐる (a. a. O. 285)。これはラッサアルが三十四、ロオドベルトスが五十四の時の事であつた。ラッサアルが後に勞働者に向つて、獨逸最大の經濟學者としてロオドベルトスの名を紹介したのは、或は多少の誇張を交ぜたとしても、前者が大に後者の學殖識見を敬重してゐたことは、疑のない事實である。ロオドベルトスの嘗て普魯西國民議會に於ける左翼中央黨の領袖たり、又旬日に滿たぬ乍らも兎に角一度宗務大臣の椅子を占めた閲歷も、亦たラッサアルをして彼れを敬重せしむる所以であつたかも知れぬ。ラッサアルは彼れを遇するに長者の禮を以てし、其書狀は常に甚

だ慇懃なるものであつた。而してラッサアルの敬愛の情は又決してロオドベルトスに依つて酬ひられなかつたものではない。二者の書信往復の頻繁なりしこと、ロオドベルトスの書狀がラッサアルの意見を批評すること頗る懇切丁寧なりしことは、充分是を證明して居るものゝ如くである。

公開答書に對する批評は既にロオドベルトスの一八六三年三月三十日附の書簡に見えて居る。答書の批評的部分は vortrefflich であるが積極的部分は「少くも猶ほ待て ἐπέχω」であるといふのが總評である。社會問題に對して積極的提案をなすには、未だ經濟學の發達が餘りに幼稚であると彼れは考へてゐたのである。而かもロオドベルトスは此時既に社會問題解決の方法が「生產組合以外に存する」ことを言つて居る。

「貴下は之を(生產組合を)一般的に遂行—即ち之を原生產及び交通にも擴張—せんと欲し、又遂行しなければならぬであらうか。製造工業に於て生產組合に資本が提供せらるゝと同じく、原生產に於ては、それに土地が提供せられねばならず、即ち一切の土地所有者の土地が收用せられねばならぬであらう。此思想は其自體に於ては何等の恐るべきものを有しては居らぬ。個々の場合に於ては收用は既に行はれて居る。又大地主は今日既に其土地を監理人をして經營せしめて居る。其場合此監理人が社會の吏員たるや否やは事態を變へぬであらう。一般的生產組合の困難、否な不可能は、寧ろ農業上工業上商業上の各經營が一々小立憲產業國となつて、各勞働者が發言參加の權を有するに至ることである。吾々が既に大なる立憲制度に厭きて居る今日に於ては、此は恐るべき思想である。國民的生產は既に斯る機關の鈍重の爲め衰滅せざるを得ぬであらう。然し縱令個々の各組合に於て Elihus の精神が行はれても、予は信ずる、組合役員は生產を消費に適應せしむることに於て今日の企業家よりも猶ほ劣れることを。—而して注意せられよ、恐慌の問題は賃銀の問題と同時に之を解決しなければならぬものである」。

即ちロオドベルトスは先づ規律と需要に對する適應能力との缺乏の故を以て生產組合に反對したのである。越えて三月十一日、ロオドベルトスはライプチヒに於ける獨逸勞働者協會委員會の需に應じ、答書を與へて其意見を開陳し（Offener

Brief an das Komitee des deutschen Arbeitervereins zu Leipzig, 1863)、その生産組合に對する反對意見をも其中に述べたが、ラツサアルは勞働者が其指導者間に顯著なる意見の衝突あるを見て意氣阻喪せんことを恐れ、之を印刷公表するに當つて、ロオドベルトスの「――又予は予が生産組合からも亦た社會問題の解決なるものに對する貢献を毫末も期待せざることを反覆する。」といふ一句を削除せしめ、四月二十二日附書簡は其事後承認を求めて居る。ラツサアルは生産組合の問題に關してはロオドベルトスとの間に意見の一致を見るに至り得るものと豫期して居る。彼れはロオドベルトスの言ふが如く、生産組合が農業にも擴張せられ、又斯る組合が「小立憲産業國」となるべきことを認めては居る。併し生産組合内に於ける規律を保つことは必しも困難ではない。「勞働者は――予は彼等を十年の共同生活に依つて承知して居る――規律と權威とに堪へ得るものである。遺憾ながら當地の日曜日の不面目なる會議の示すが如く、殆どあり過ぎる程其能力を有するものであり、又巴里及び英吉利の現存組合は、既に其の光輝ある證據を示して居る。殆ど此等凡ての組合に於て、理事は經營遂行に關し、多少の差こそあれ、無限の權限を有して居る」。

需要に對する適應能力に就いてもラツサアルは同じく樂觀して居る。「此事は予の見る所を以てすれば、正に大生産組合によつて最も適切に行はれる」。國家信用の援助を受ける生産組合が久しからずして一生産部門全體を一個若しくは極めて僅少なる生産組合に結合するに至るべきことは疑を容れぬが、「其場合には此の部門組合は自己の帳簿に於て消費の最良統計報告を有すべき筈である。過剰生産を招致すべき競爭は、僅に外國からのみ作用し得るであらう。而して最後に其場合過剰生産は決して過剰生産でなくて、單に豫行生産に過ぎぬであらう。蓋し此等の組合は其の巨大なる資本等を以てすれば、賣却を餘儀なくせらるゝことがない。而かも一の過大生産を一の豫行生産より過剰生産に變ぜしむるものは此一事あるのみだからである」(325)

而かも實際政治家たるラツサアルは、必しも生産組合の案を固執せず、ロオドベルトスにして是に代るべき良案を示すならば、敢て其採用を辭せぬと申出でゝ居

る。ラッサアルの云ふ所に由れば、彼れは理論上最も完全なるものとして生産組合を提案したのではない。實行容易にして、勞働者の興味を惹くに足る具體的一案として之を提議したに過ぎないのである。（325）

ロオドベルトスは「社會の進化は究局勞働者を資本家及び地主となすことではなくて土地及び資本所有を廢止するに傾く」ものと信じて居る。而して彼れは此命題の實現は「個人企業の組合企業への變形よりも今日の工業狀態により、容易く、より善く連絡するもの」と信じて居る（328）。故に彼れを以て見れば、ラッサアルの提案は歴史的進化の傾向を助成せずして、之れに逆行するものと謂はねばならぬのである。ラッサアルも同じく資本及び土地所有が廢止せらるべきものなることを信じて居る。「土地及び資本所有が廢止せらるべきものなること、――是は正しく予が經濟學的思索をなすに至つてより以來の予の見解の中核をなすものである。貴下は既に貴下の第三公開狀の終りに於ても之を言明して居られ、――而して正に其故に予は久しく深く貴下に傾倒して居るのである。勿論未だ今日それを民衆に告げてはならぬし、又正に其故に予は予の小冊子に於て大にそれを避けたのである。併し乍ら予は、若しも組合の爲めの國家信用があるならば、是は正に生命の自然の發展の結果として、百年乃至二百年（縱令五百年ならずとするも）にして始めてそはあるが、漸次必ず其處に導かなければならぬとてその端緒たるものである」（四月廿八日附書簡）「國家補助を以てする組合が必ず吾々の共に欲する結果を有すべきことは、貴下も之を爭はぬであらう」（五月二日附）。

ロオドベルトスは明に之に反對する。「……貴下が『國家補助を以てする組合が必ず吾々の共に欲する結果を有すべきことは、貴下も之を爭はぬであらう』と言はれるのは謬つて居る。予はそれを斷然爭ふものである。然らずんば予は予の『公開狀』中に自らそれに對する一般的疑懼を表明しなかつたであらう」（五月九日附）。ロオドベルトスは資本及び土地私有なき結局狀態に到達する爲めの過渡期の方策としては、勞働收益の增加と共に賃銀を增進せしむべき方法を工風すべきもので、勞働者をして現在の企業家の如く利潤を收得せしむるの方法を講ずべきものではないといふ意見を持つてゐる（328, 342）から、彼れはラッサアルに凡そ次の如く言はんことを奬めるものである。曰く「勞働者階級の狀態の改善は要するに必要

措くべからざるものである。此事を行ふには大體二の方法が考へられる。何れにかして勞働者に利潤と地代とに參加せしむるか、又は實際賃銀を必要賃銀から引き離して自然賃銀即ち全生産物に一層近づけようとするかの何れかである。予(ラツサアル)は第一の方法を一層實行し易きものと思惟するが、然し社會問題の友にして第二の道を一層歩み易きものと思惟するものゝあることを承知して居る。吾々(ラツサアル及び其のライプチヒの友人等)は先づ普通選擧の爲めに努力せんと欲するものであるから、此兩者を論ずるには猶ほ時を有する」と(345)。

ラツサアルは猶ほロオドベルトスに服せぬ。「國家が――始めは低利にて、後に無償に――提供する資本を以て援けらるゝ組合が此効果(賃銀利潤利子の別を消滅せしむる)を擧げぬといふことを貴下が如何にして言ひ得るか、予は了解に苦しむ。是に就いては必ず貴下の側か予の側かに誤解があるに違ひない。斯る方策の實行可能性に就いては議論があるかも知れぬ　然しそれが實行せられた場合、必ず此効果を擧ぐべきこと、これは……然し否定することが出來ぬ。若しも國家資本を有する勞働者に依つて、單純なる資本利子に對して生産が行はれ、勞働收益は勞働者の間に分配せらるゝならば、既に企業家利潤は廢止せられる。又若し生産が無償資本を以て行はれるならば資本利子も亦排除せられて、資本所有は貴下が此頃欲求せられたやうに撤廢せられるのである。されば何れにしても、貴下がそれが實行せられ得るものとし、又實行せられたものとして、組合に彼の効果あるべきことを容認せられないのは抑も何故であるかを、何卒一層詳しく説明せられたい。何となれば此場合吾々の一方が必ず相手方を誤解して居るに相違ないからである(五月十一日附)。

ロオドベルトスは之に答へる爲めにそのキルヒマン宛て第三公開狀から次の一句を引用する。曰く、「否な、土地資本及び勞働生産物は分業開始以來未だ曾て一度も勞働者の手に屬したことがなかつたと同樣に、將來も決して勞働者の手に屬してはならぬ」と。此故に彼れは結局勞働者を資本家となし、土地所有者となし、(ラツサアルの生産組合に於て行はるべきが如く、)斯くして彼等に勞働收益を悉く歸屬せしめんとするの方法を――斯くして勞働者に賃子を歸屬せしむることを得た場合、勞働者は勞働收益を收得するであらうといふことが假りに正しいとして

も（それは又別の理由から實行不可能であるが）――全然謬れりとなすものである。資本と土地所有とは、之を單に再び勞働者組合の私有物たらしむる爲め、國家の干渉に依つて其現在の所有者から扭ぎ取らるべきものではなくて、彼等の手（二百年は貴下も亦た承認せらるゝものか）に留まるべきものであり、勞働者境遇の改善は實際賃銀を引上げて、之を自然賃銀に接近せしむるの方針に於て行はれなければならぬ（五月十五日）。

ラッサアルは今や勞働者協會運動の旋渦中に居て眠食の時も惜しまるゝ身であつたが、而かも猶ほよく勉勵してロオドベルトスと此理論問題を討論した。併し彼れの所論の理論的一貫を缺くことは漸く明瞭となつて來た。五月廿六日附の書簡は曰く「……若し土地資本及び勞働生産物が勞働者に屬するならば、社會問題解決の到底あり得ざることは、太陽の如く明白である。勞働者に土地及び資本の利用が委せられて、勞働生産物が彼れに屬する時にも亦た略ぼ同一の結果が生ずる。其場合、農業組合にあつては勞働者は其勞働生産物よりも或は多く或は少くを收得するであらう。工業組合にあつては彼れは、通常其勞働收益よりも多くを收得するであらう」。其故彼れは故らに社會問題の解決といふ言葉を避けて、單に「勞働階級の境遇改善」といふに止めたのである。問題は決して理論的原則的究局的解決には關せずして、單に實際的過渡方策に關するに過ぎぬ。たゞ「解決」が漸次組合に依つて齎らされ、又驚くべく容易ならしめられることは、予を以て見れば、爭ふべからざる所である」。

ロオドベルトス是に應へて曰ふ、「土地資本及び勞働生産物が勞働者に屬する場合には『社會問題の解決』は今迄よりも更に遠ざかるであらう。地方的生産條件が良否を異にすることによつて必然的に生産組合の間に發生しなければならぬ衝突を如何にして貴下は平らげんとせらるゝか」。第一級の小麥地に於ける農業組合と礫确なる裸麥地に於ける農業組合との間の、又は無代價を以て最も豐富なる水力を利用し得る工業生産組合と高價なる蒸汽機關を備へ付けて、遠方より其爲めの石炭を取寄せなければならぬ工業生産組合との間の衝突を如何にして平らげんとするか。勞働組合に「土地及び資本の利用が委せられて、勞働生産物が彼等

に屬する」場合にも同一の反對が該當する。此場合には國家がより好き地方的地位の利益を沒收することに依つて平均が行はれ得るものゝ如くである。併し自然の生産的異同は極めて大であり、且つ社會的關係は極めて不利なる事情の下に於ても生産を營まねばならぬやうに形成せられて居るから、結局「比較的有利の地位にある組合は他の組合の水準に引下げられねばならぬことゝなり。國家が唯一の地代及び資本利子收得者となり、賃子は再び存在する」ことゝなるであらう。次に農業勞働者は如何にして「其勞働生産物よりも或は多く或は少くを」收得し、工業勞働者は如何にして「通常其勞働收益よりも多くを收得する」か。「抑も勞働者が今日並に何時なりとも造り出す所の一切のものは、よし其手には歸屬せずとも、依然其勞働生産物又は勞働收益ではないか。抑も如何なる場合に於て彼等は「より多く又はより少く、若しくは通常より多く」を收得すべきか。或は此場合貴下は既に組合の有利なる地位にあるものと不利なる地位にあるものとの間の平均を念頭に置いて居られたか。併し然らば第一に、如何なる平均方法を貴下は有せらるゝか」（五月二十九日附）。

ラッサアルの説明によれば、農業生産組合の場合に於ける勞働生産物よりも「或は多く或は少く」といふ「多く」は、即ち優良なる土地を耕すものゝ地代收得を意味するものである。而かも或一人が其の正當なる勞働生産物よりも多くを收得するならば、他の一人は其正當なる分前よりも少くを收得しなければならぬ。「更に精しく言へば、予の正當なる勞働生産物（社會問題の究局的解決の意味に於ける、即ち予が茲に「より多く又はより少く」といふに際して常に基準並に比較尺度として假想する「理想」に適へる）とは何ぞや。それは予が農業上工業上一定任意の狀態の下に於て一定量を生産し、別の一人はより有利なる狀態の下に於て同一勞働を以てより多くを生産し、第三の者は一層不利なる狀態の下に同一勞働を以てより少くを生産する場合の予の個人的生産物を謂ふものであるか。決してさうではなく、予の勞働生産物は全社會的生産力に對する分前で、予の勞働量の全社會の勞働量に對する比例に由つて定めらるべきものである」然らば地代は如何にして之を廢すべきか。「それは極めて簡單である。それは最下級の耕地には全然觸れないで、それ以上の凡べての土地に差等を設けて、換言すればその地力の優良の度に應

じて――即ち差等の全額丈け――賦課せらるゝ地租に依るのである。されば此地租は全べての地代を廢する、即ち之を國家の手に移して、勞働者の手には均一なる實際勞働收益丈けを殘す事になるであらう。――斯る方策は今日に於ては不可能であらう。併し貴下は國家が耕地を農業生産組合の手に交附した曉には、如何にそれが容易となり、又如何にそれが實現せらるべきかを認められぬか。――此の差額地租は工業生産組合が不取敢國家の資本に對して支拂ふべき利子に代るであらう。此地租は農業勞働者の組合が土地の交附に對して國家に納附すべき代償となるであらう。即ち或者は全く之を納めず、他の者は其地力に應じて二、三、四、五、或は十、七十を納めるやうにするのである。農業勞働者組合は正義の感情及び嫉妬心からでも熱心に此の公平なる支拂方法を歡迎するであらう。――國家は教育學問藝術其他一切の歳出を支辨すべき資源を此地代に求める。而して斯くすれば何人も地代を收得することがなくなるか、或は凡べての人が均等に地代を收得することになる。農業勞働者の生産組合は全然開拓的先驅的性質を有し、漸次必ず社會問題の決定的解決に導くに相違ない」。此理は工業的生産組合に於ても同一なることは言を俟たぬ。凡そ二三十年にして一都市の一生産部門全體は一生産組合に統合せられ、而して「此事が最重要生産部門の多數に就いて行はれるや否や、私的中間商業は廢せられて販賣は國家が設けたる販賣所に於て營まれる等の事に自ら必然的に導かれはせぬであらうか」。此故にラッサアルは國家に發する組合が一切將來のものに對する「有機的發展萌芽」たることを否認すべき理由を解せぬといふのである(36r-3)。

併しロオドベルトスは賃銀も利潤も地代も皆な勞働生産物なりとなすものであるから、勞働生産物「より多く或は少く」といふことを承認しない。又ラッサアルは國家をして地代を收得せしむることに依て地方的生産條件の異同を平均しようとするものであるが、國家にして彼れの言ふが如く勞働者に屬する場合には、優良の地位にある生産組合は必ず其特權を利用せずには措かぬであらう。「集合人格は個人よりも强靭なる生命を有すると同樣に、又これよりも强靭苛刻なる利己心を有する」(36d)。

ラッサアルが提議した地租徵課の問題は、又二人をして轉じてリカルドオ地代

論の當否を論ずるに至らしめた。いふ迄もなく、ロオドベルトスは最劣等地は地代を生せずといふリカルドオの地代論は「地代の差等のみ」を説明して其「原理」を説明せずといふものであるが（拙稿「較差地代と絶對地代」本誌第十八卷第九號所載）ラッサアルは之に反してリカルドオの理論は「今日に取つては、單に地代の差等其者を説明するのみならず、一般に正に地代其者を説明する」と謂ひ、ロオドベルトスが頗る説明に努めた最劣等地の地代はリカルドオに從へば地代ではなくて「資本利潤又は工業利潤と稱せらるべきもの」であるから、兩家の説は決して相兩立し難きものではないといつた。ロオドベルトスは無論それを容認しないのである（36-73）。

さて生産組合が果してやがて資本及び土地所有の廢止となる「發展の萠芽」たるべきや否やであるが、ラッサアルは前述の如く、既に各生産組合に其個別的勞働收益を收得せしめないで、之を或標準に依つて社會全體に分配しようとしてゐるのであるから、其立場は既に半以上放棄せられて居ると言つて好いのである。ロオドベルトスはラッサアルが最後の書簡中の一通に於て「併し予が經營の爲めの資本の生産組合に屬せんことを欲するとは、抑も誰れが貴下に告げたか」と言ふに至つたと明言して居る（Rudolph Meyer 宛て一八七二年五月二十四日附書簡、Bernstein, Lassalle, 1919, 222 引用）。此文言は今回編纂の往復書簡集中には之を發見することが出來ぬ。併しロオドベルトスが證據なくして是れ程の明言をなすべしとは信ぜられぬから、此書簡は紛失に歸したと解するの外あるまい。又此言明はなくとも、ラッサアルは生産組合の個別的勞働全收權の承認すべからざることは、既に之を認めてゐたのである。

生産組合の問題に就いては、ラッサアルはロオドベルとの間に意見の本質的相違は存せぬと解するものゝ如くであり、又右述の通り結局後者の説に服したるものゝ如くであつた。併し普通選擧の問題に就いてはラッサアルは毫もロオドベルトスに讓歩せず、兩者間の溝渠の趁え難きものたることは當初から明瞭であつた。ロオドベルトスはライプチヒ勞働者委員會に與へた公開狀に於て、普通選擧は必しも勞働者階級をして政權を掌握せしむるものではない。まことに普通選

擧は或目的の爲めの手段に外ならぬが、此手段は種々樣々の目的――實に極端なる正反對の目的に供用せられ得べきものなることを忘れてはならぬ「貴下等は此に必然貴下等が掲げたる目標に導くに相違なき手段を有するものと確信するか。予はそれを信せぬ」と言つたが、四月十三日附ラツサアル宛の書簡にも、彼れは「貴下が普通選擧法を社會問題中に投じたことを實行上の誤謬と認める」と云ひ、又「六月戰（巴里に於ける一八四八年六月の暴動）に於て社會問題を殺したものは、普通選擧法であつたことを一考せられよ。究局に於ては勿論兩者は同一事に屬する。併し運動上に於てはさうでない。若し貴下にしてそれを訂正することが出來るならば、社會問題の利益は強められるゝであらう」と言つたのである。彼れはラツサアルに「反動をも革命をも顧慮することなく、社會問題其者のみを取扱」はんことを希望したのである。

併しラツサアルに取つては、社會問題は終始政治問題權力問題たるものである。彼れは此問題に於ては當初からロオドベルトスの批評を肯んじない。彼れはいふ「普通選擧法なくして、即ち吾等の要求を實現すべき實行上の手がゝりなくして、吾々は一の哲學々派又は一宗派たることは得やう。併し鬱じて一政黨たることは得ぬ。故に予の見る所では、普通選擧法が吾々の要求に屬することは猶ほ柄の斧に屬するが如きものであると（四月三十日附書簡）。

ロオドベルトスは革命に望を繫けて居らぬ。彼れはラツサアルを以て時勢の觀察を誤れるものとなして居る。曰く「歐羅巴に於ける革命諸勢力は今日十年前よりも薄弱となり、離散して居り、從つて相互に麻痺せしめ合つて居る。而してこれが常に該撒主義（Cäsarismus）がそれを通じて世に現れ來る空際である」（五月九日附）。「併し今諸黨の鬪爭と貴下が再び獨逸に於て如何にして社會問題を捉へたかを考察する時は、該撒主義が共和國よりも貴下の解決に近きものたりとの意見は益々堅くせられざるを得ぬ」（一八六四年一月二日附）と。

然らばラツサアルの運動を歡迎して「勞働階級をマンチエスタア學派の繩索から解放する爲め……に貴下が立たれたことは眞に幸とすべき事である」と言つたのは（十月十九日附）何の爲めであつたか。それはロオドベルトスの立場から見れば、結局ラツサアルの運動に依つて世人を社會問題の重要なることと、自由主義の

排棄せられねばならぬことゝに覺醒せしむることあるが爲に過ぎぬ。「予に於ては此の今日の勞働者運動を差し當り民衆に取つての大なる稽古時間にして、吾々は全然教育的態度を以て之に臨まなければならぬと認めるものである」。目前の實效を收めんとして苦慮せるラツサアルに取つて、これが如何に頼りなき聲援であつたかは、想像に難くない。ラツサアルに取つてもそのロオドベルトスとの、殊に政治問題に關する意見の懸隔甚しきことは、漸く餘りに明白になつた。彼れも終にロオドベルトスとの意見の相違斯の如くならんとは、その豫期せざりし所で、彼れに怪訝と苦痛とを感ぜしめた」と言ふ（一八六四年二月）に至つて居る。此の時に於ては彼れは全くロオドベルトスの來援を斷念しなければならなかつたのである。

孫江二氏の社會主義

――輓近支那經濟思想考の一節――

及川恒忠

一

學者、蔡子民氏が、李季の飜譯したるThomas Kirkupの History of Socialism の譯書『克卡撲氏社會主義史』に寄せた序文の一節に

> 西洋の社會主義は今より二十年前に支那に輸入された。一方に於ては日本留學生が日本より間接に輸入し、飜譯書の中に『近世社會主義』といつたやうなものがある と同時に他方には佛國留學生が佛蘭西から直接に輸入したところもあつた。彼等は始めは日刊の『新世紀』紙、後には週刊の『民聲』紙等で簡單に社會主義を紹介したものである。

とある。則ち近世社會主義が支那に在つても經濟思想界の一端を占據するようになつたのは最近二十年來のことである。余輩の知り得る限り、社會主義を最初